

第1回資源管理方針に関する検討会
(マイワシ対馬暖流系群、マアジ太平洋系群及び対馬暖流系群)
【議事概要】

令和2年7月31日
(令和2年8月7日更新)
水産庁

1. 日 程 令和2年7月30日(木)～31日(金)

2. 場 所 福岡国際会議場国際会議室

3. 出席者

水産庁：藤田資源管理部長、魚谷資源管理推進室長、晝間管理調整課補佐、
上田漁場資源課補佐ほか

水研機構：西田水産資源研究センター浮魚資源部長、大下同副部長ほか
このほか漁業者、漁業者団体、研究者、行政官、等、計約85名

4. 概 要

≪1日目：7月30日(木)≫

(1)水産庁より、資料4を用いて改正漁業法下における新たな資源管理について説明。

【主な質問・意見】

- 関係者の理解を得て進めるとのことだが、スケジュールありきではないか。隠岐の漁業者は離島なのでコロナを警戒しているし、他でも感染者が出ると1ヶ月以上休漁で取り返しがつかない。今日の参加者が少ない事情として認識して欲しい。本当に十分な説明をしたと言えるのか。境港では個別の説明会の開催をお願いしているが、説明会での意見等をSH会合と同等に扱うよう強く願う。
- 質問が2点。①TAC意見交換会はなくなるのか。②個別の説明会で水研への試算の要望が出た時に、対応してもらえるのか。
- 資料4の2ページに、資源調査の記載があり太平洋の調査の図が載っているが、対馬系群のマイワシで調査をしているなら示すべきでは。

(2)水研機構より、資料5-1に用いて資源評価に係る基本事項について説明。

【主な質問・意見】

- サバ・マアジ・マイワシの3魚種が、同時にMSY達成水準になったことがあるか、また研究者として実現可能性があると思うか。
- 3魚種ともMSY水準となれば、餌や生息地が足りなくなるのではないか。海の生産性は下がっているのではないか。魚種交代もあるのではないか。
- 31万トンのMSYが、加工流通のキャパシティを考慮して、有効活用できるものなのか。獲っても無駄になる、活用できないのであれば、そのようなMSYを目指す意味があるのか。対馬系群で31万トンが処理できると思えない。

(3)水研機構より、資料5-3及び5-6を用いて、マイワシ対馬暖流系群の資源評価結果について説明。

【主な質問・意見】

- 直近の再生産が通常加入期のホッケースティックより低いのに、通常加入期を使うことは適切なのか。現場の処理能力が低下しており、30 万トンとれても処理能力にそぐわず、漁業者の資源管理への意欲もわからない。現状の低加入に合わせたホッケースティックとすれば、MSY 水準も下がって納得できるのではないか。
- 資料5-6の 50 ページに、移行期の3年間を除いて、通常加入期を計算した再生産関係があり、適切と思うので、漁業者に提示して議論すべき。
- 資料の 11 ページ、現状のままでいずれ MSY 水準に回復すると理解してよいか。10 年後で達成しないといけないのか、現場のニーズがあるのか、シナリオ選択の際に議論が必要。
- 太平洋と対馬で、現状の資源量が 10 倍違うのに、将来的に同じ MSY 水準 100 万トンを目指すのは、感覚的に理解できない。
- 漁獲シナリオの平均漁獲量について、なぜ 2021 年にこんなに漁獲量を減らさないといけないのか。2022 年以降は一定に漁獲量が増えていくのに、2021 年だけ大きく減らすことが理解できない。当面の数年間は平均的な漁獲量とし、その後徐々に漁獲量を増やす計算は可能か。
- 過去に大幅に資源が減った理由は、乱獲と思っているのか。宮崎沖で魚を獲っていたが、値が下がり、生産調整をしていたが、それでも資源が減少した。そのような中で漁獲シナリオにあるようなシミュレーションで漁獲を決める意味はあるのか。
- 境港では、昨年は水揚げが 8 万 5000 トンで、歴史上最悪だった。あじ・さば・いわし 3 魚種とも獲れなかった。今年の初め、大中まきで 2~3 歳魚がまとまって獲れ、資源があったことが分かった。3 月からコロナの影響で、自主的な水揚げ制限をしたが、全船が全力でとればもっととれた。境港で 4 万トンとれているが、昔と同じ処理能力があれば、10 万トン獲れていたと思う。TAC の留保枠追加配分をしながらも、工夫して獲る量を抑えてきた。これらの獲らなかった魚が、資源評価に反映されていないと感じている。境港の話聞いて欲しい。不確実性を考慮した管理をして欲しい。
- コホートは境港での漁獲の年齢組成しか考えていないのでは。
- 将来予測に使った年齢別成熟率、体重、選択率は何を採用しているか。石川の中まき網の CPUE は反映されているか。
- 漁獲に選択性があり、いるから獲るというよりは、他の魚が獲れるときはいても獲らないことがある。公表される資料の中に、不確実性が高い資源であることを明記すべきでは。
- 資源評価に、数値的状況だけでなく、漁業者からの意見交換やアンケートなどでくみ取って、評価にどうつなげるか、仕組み化するのは難しいかも知れないが、形にする努力をして欲しい。
- 2020 年の加入があったことは、次回示される資源評価に反映してもらえるのか。
- 調査体制が脆弱。10 年先を見据えるなら、いつまでにどう改善するか、できれば次回 SH 会議までに具体的に示して欲しい。

- 資源評価会議の成果物にも不確実性の記載がある。
- 10 年間一定の漁獲圧のシナリオになっているが、最初の2～3年は現在の漁獲圧という試算もして欲しい。
- 全てをアウトプットコントロールでやろうとするから、このような問題になるのであって、もう少しインプットコントロールやテクニカルコントロールを、科学的にも管理的にも考慮してはどうか。
- 限界管理基準値を下回っている場合、まずは限界管理基準値を上回るための目標を定めるのではないかと、10 年後に MSY を目指そうとするから厳しい管理になるのではないかと。 $\beta = 1$ 以上は法的に採用しえないのではないかと。目標設定をどうすべきなのか。
- WCPFC では、暫定管理基準値を設けている事例もある。不確実性が高い資源でもあるので、まずは5年で限界管理基準値を達成するようなシナリオもシミュレーションして示して欲しい。
- MSY の 30 万トンでは処理できる水準でなく、漁獲できない。漁業者は資源管理に向かえない。他方で目の前の漁獲を半減されれば、大中まきは混獲しか出来ない。そうすると陸の加工業者、冷凍庫が持たない。
- 5 万 4 千トンという数字は影響が大きい。移行期を入れないシナリオも検討してもらいたい。

(4) 水研機構より、資料5-5及び5-7を用いて、マアジ太平洋系群及び対馬暖流系群の資源評価結果について説明。

【主な質問・意見】

- 資料の5-3、21ページの将来の平均漁獲量は、韓国の漁獲量を含み、それを差し引いた数量が日本の漁獲可能量となるか。実績とつりあってくるのか。
- 両系群で、東シナ海からの加入が重なっているが、加入がどちらにいくかをどう考慮しているのか。
- β のシミュレーションが 0.1 刻みとなっているが、50%を超える水準がどこにあるのかを示して欲しい。

《2日目：7月31日（金）》

(5) 冒頭、1日目の議論の総括を行った。

【主な質問・意見】

- 福岡魚市は、この会合の開催について知らなかった。HP を見れば分かるのかも知れないが、今回は流通加工の参加者は限定的である。
- TAC が始まった時、TAC が実漁獲の 10 倍あり、影響がないとの説明だった。資源評価のやり方が変わり、実漁獲に近い TAC が設定するようになってきた。太平洋クロマグロが、初めて実漁獲に影響があり、現場の混乱も生じるような事例だった。周知する際に、伝えるだけでなく、関心を持ってもらえるように周知すべき。

(6) その後、1日目の質疑応答（マアジ太平洋系群及び対馬暖流系群の資源評価結果

に関するもの)の続きを行った。

【主な質問・意見】

- 評価に反映されない中国、また漁獲量の信頼性に疑問がある韓国について、改善しているのか。いつまでに何をどう改善するのか具体的に示さないと、日本が厳しい管理をすることに漁業者の理解が得られない。
- 資源評価の会議が非公表となり、結果だけを聞かされている。研究機関会議の議事録を資料として出して欲しい。また今回出た意見は、研究機関会議で議論して、結果を次の SH 会議で報告して欲しい。

(7)水産庁より、資料6を用いて、漁獲シナリオを検討するに当たって考慮すべき内容について説明。

【マイワシに関する主な質問・意見】

- MSY は資源の有効活用のためとあるが、31 万トン是有効活用できる数量なのか。
- MSY を目指すことは法律に規定されていると理解。シナリオでは 10 年で達成とあるが、より長期に、20 年、30 年かけて到達するシナリオとすれば、陸の処理能力も漁獲に合わせて整備されるのではないか。
- 資源再建計画は、誰が作り、どのような内容で、計画に従うのは誰になるのか。
- 資源再建計画は誰が作るのか。全面禁漁のような厳しい措置が講じられるのか。
- 資源再建計画について 10 年という数字が法律に出てこないがどこに規定しているのか。漁獲が1年目に大きく減少するが、激変緩和措置はとれないのか。
- MSY は 31 万トンを目指すのか、補足資料にあるような 20 万トンを目指すのか。
- 1988 年から 1990 年までの再生産関係を除いて、MSY20 万トンを目指すのか。
- 2021 年の漁獲急減を緩和するため、最初の数年、 β は1を超えるような数字とし、示すことは科学的に可能ではないか。できないなら、10 年という期間が適切か、MSY を目指す必要があるかという議論に戻ってしまう。
- サバの時と状況が違うのは、コロナで経済が厳しくなっていること。TAC を 5 万 4 千トンに減らした場合の経済の影響を、第2回会合で水産庁が示して欲しい。30 万トン獲れるようになった時の経済的評価も同様。
- 概ね 5 年で目標とシナリオを見直すと思ったが、マイワシの資源特性、より頻度を高めて見直すことも必要では。新たな資源管理で、融通などに取り組むのはいつから。
- 漁業者として、急激な漁獲枠減少を懸念。くろまぐろはある程度来遊時期を予測できるが、ブリをまきたくともヨコワが混ざる恐れがある場合、漁場を放棄するなど苦労した。イワシは来遊があると避けようがない。イワシを避けるために、他の魚が獲れない状況は避けて欲しい。
- MSY は賛成だが、マイワシはコンスタントに獲れるものでなく、20 年、30 年の周期で獲れるようになるもの。サバやマアジと同列に扱うべきでない。施行を遅らせられないのか。系群を太平洋と対馬系群を合わせて管理することはできないのか。
- 再生産関係の 1988 からの3年間の移行期を通常期から除去する資源評価について、AIC と MSE で評価しているが、差はわずか。科学者も、実際漁業をしている人の意見を勘案して評価を行うべき。

- 対馬マイワシの水揚げが一番多い境港で、獲れる年と獲れない年が交互に来る。2・3年かけた複数年管理ができないのか。また、クロマグロでやったような、繰越、繰入はできないのか。
- 漁業者は数字しか見ず、1年で漁獲量がガクッと減ると、管理が厳しくなるようにしか見えない。1年減らせば加入が増え、その後漁獲が増えることを丁寧に説明すべき。
- β を変える等、いくつかパターンを設けたシナリオを示す中で、15年や20年で達成するシナリオも設けて欲しい。
- 高水準期の分布エリアは広いが、太平洋マイワシが回っている可能性はないのか。

進行役より、マイワシ対馬系群のシナリオについて、第2回SH会合に向け、参加者の意見を以下のとおり要約した。

- 8月の資源評価において、1988から1990年の再生産関係を除去したシナリオを、次回SH会議で示すことを希望する。
- 現在推奨されている再生産関係に基づく資源評価では、当面の漁獲を β が1を超えない範囲で設定して、出来るだけ8万トン程度に近い数値を目指すとともに、2031年の漁獲を20万トン程度にする。この場合の β は、例えば0.6とか0.7とか小さくても構わない。それで10年後に50%以上の確率でMSYレベルの資源量を達成する水準となるようなシナリオを示すことを希望する。
- (採択の可能性は極めて小さいと考えられるが)、当面の間、8万トンから9万トン程度の漁獲量に固定し、その後低い β での漁獲とする場合、資源量の予測とMSYレベルの資源量を達成する確率を示すことを希望する。
- これらの試算は、2019年以降の更新された資源量推定値に基づいて行ってもらおう。

【主な質問・意見：マアジ】

- 系群の扱いはどうなるか。合わせて管理する場合は、TACはどの数字になるのか。
- SH会合は、公聴会的な存在で、重要であり継続して欲しいが、TACが決まった後、最終的に数量が配分されてからもめることになり、その結果シナリオの話に戻ってしまうこともある。サイエンスを扱うSH会合とは別に、合意形成のためのプロセスとして、配分会議のようなプロセスが必要では。

進行役より、マアジ対馬系群・太平洋系群のシナリオについて、第2回SH会合に向け、参加者の意見を以下のとおり要約した。

- マアジの対馬系群と太平洋系群を、管理上一つのものとして扱うことには異論がない。
- マアジ対馬系群について、2031年漁期に親魚量がMSY水準を上回る確率がちょうど50%を達成できる β を、シナリオとして提示することを希望する。
- マイワシでは過去最高水準が目標で、マアジは現状が目標で、サバではその間くらいだった。このような違いが生まれる理由は。

- 新たな資源管理の中で、地域によって漁獲に偏りが生じる可能性。サバの余っている県と、アジの余っている県で交換するような、フレキシブルな運用が必要では。
- 新たな資源管理で、TAC の何が変わるのか教えて欲しい。大きな来遊がきて、漁獲が上振れした場合に、数量で漁獲ができないとされれば、漁業者も納得しない。留保のやり方など、年々変わっている中で、TAC の信頼を確保していく必要。
- 最初の TAC 設定以降のスケジュールを、次回の SH 会合では示して欲しい。
- 配分数量の基準と試算を、早く示して欲しい。
- 出された数字を消化していくことが重要であり、消化できるような仕組みを検討してほしい。
- 運用上の仕組みとして、合意形成や、漁獲の報告、経営支援といった議論が見えてこないの、議論を活性化して欲しい。
- 資源再建計画をどう運用していくか、大きな問題。パブコメや水産政策審議会にはかけると思うが、それで関係者の合意を得られたとはならないので、慎重に検討して欲しい。

(8)水産研究・教育機構より、参加者からの要望を受け、マイワシ・マアジに関する各種調査の概要について、追加で説明を行った。

【主な質問・意見】

- 思った以上に様々な調査が行われているが、資源評価に用いていないものが多いのではないか。
- 海を一番見ているのは漁業者であり、資源管理に関心を有する漁業者がいる。漁業者の目で得た情報を、試験場を通じたものを含め、吸い上げて欲しい。

(9)進行役より、2日間の議論の総括を行った。

以上のような議論を行った結果、第2回検討会では、更新された資源評価結果を示しつつ、上記宿題の回答を行い、具体的な管理について議論していくこととなった。

以上